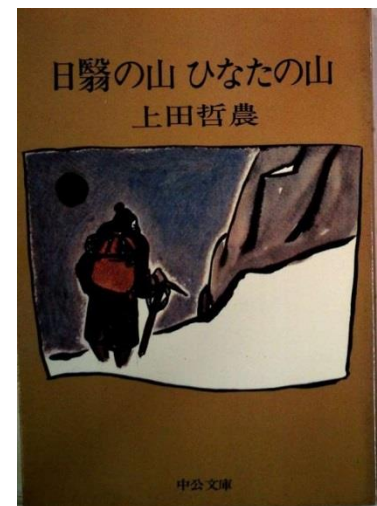


上田哲農著 『日翳の山 ひなたの山』

白と黒だけの墨絵のような筆致の挿画がほんのりとして楽しい。著者は昭和の初めに日本登行会の創立に参加し、以後 RCCⅡの代表も務めたクライマーであるが、本職は絵描きで、その折々の山行を画文に纏めたもののひとつがこの本である。書かれたのは50年以上も前のことであるが、今読み返しても新鮮である。ユーモア溢れた文章もなかなかのものである。

題名の「ひなた」、「日翳」について、著者は本書の跋の中で、「ひなた」とは実際の山行や実生活のことであり、「日翳」とはそれらに至る思索であるとしている。「表の世界」と「裏の世界」と言いなおしても良いだろう。



ふみわける奥上州の斑ら雪　　淋しかりけり、空のま青さ。
童女ひとり黄泉にそそれる高山を　　喘えつ、越ゆてふこの経悲し。
いきどおる心おちつくすべなさや、　新雪冴えて山は霽れたり。

この詩は、娘の夭折を歌ったものであるが、娘に続けて父も幼い息子も失ってしまった著者は、やがて深い深い「翳」の部分に昇華していったのであろう。そのような眼で読んでみると、ユーモアに溢れた文章の行間には、そこはかとない人生の悲しみが滲み出しているようにも思える。

別稿『夢幻の山旅』のページの「初夢の山　白馬岳・主稜」の中で引用した白馬岳・主稜の様子は、この本の『ある登攀』の章で著者が実際に苦労して登攀した紀行である。

中公文庫 1979 年刊

(2006 年 10 月　記)

[「山書の小溪」目次に戻る](#)